目白

近藤義見

勉強に疲れて窓を開けると、ほてつた額に夕風が涼しい。夕陽を受けた山の樹々が一層新綠を裝つて芳しい匂ひが鼻に來る。机にもたれ乍ら新綠の夕映えする景色に見取れて居ると、目白の鳴く聲が聞へて來た。耳を澄ますと二三羽居るらしい。私は暫くその鳴き聲に聞きとれて居た。

私は幼少の頃より目白に可成りの親しみを持つて來た。未だ小學校に通つて居た時分、秋から冬に掛けての目白捕りは樂しい日課の一つだつた。又捕らへた目白は毎朝餌をやつたり、水をやつたりして隨分苦勞して馴らしたものだ。春になつて良い聲で高音を張る樣になると、日當りの良い緣側の軒場に籠を掛けては、その聲に桃源境を想像し、又山に持つて行つて草原に寢ころんでは、その聲を聞いて往く雲に思ひを托したりして樂しんだものだつた。目白。私の幼時の思ひ出には無くてはならぬものだつた。

可樣に目白に親しみを持つて居た私が今、この延山で其の懷しい鳴き聲を聞いたのだ。思ひは幼少の故郷へと飛ぶ。

今靜かに目を閉じると、故郷の有樣が繪卷物の如く現れて來る。家の裏山に登つて新綠に包まれた村を眺め、將來偉くなつて村の爲に努力しようと思つたこと。そして其の中に現れて來る野、山、川、それは戰ごつこに、鯉釣りに、幼き頃駈け廻り且つ惡戲した所だ。遊びあかして夕闇を歸つて來ると母が門口で待つて居たりした。噫、母！ 故郷の懷かしさは又戀しさに變る。戀しさを增すとなぜか自然に淋しくなつて來るのだ。故郷を懷ふ心は懷しいだけに淋しい。

我に返つて外を見るともう夕陽は翳つて、薄い夕靄が樹々を包んで居た。目白の聲は聞えなかつた。私は夕靄のやうな淋しさをどうする事も出來なかつた。(2)

日記

丘龍芳

二月三日（木）晴　零下五度

冷たい朝風が身を切る樣だ。おゝ寒い。戶外を見ると雀が二三羽寒さうな顏をして枯木にふくれたまゝ動かふともしない。今朝は霧が深かつた。寺平もあの墓場も霧に包まれて氷のやうに冷たく感じた。今朝は監督樣のお出掛で特に多忙だ。九時、元氣なお顏でお出掛けになつた。用を濟まして統學寮へ行つた。寮生一同机の前で小さく蹲つて居た。霧は大分霽れて朝日が室に明るい。屋根をつたひ落つる霧どけの雫が白く光る。庭の霜柱の解ける音が親しい。寮生と雜談して居ると、突然M役員樣がとんで來て

「T君、甲府が火事でA家が燒けたぞ！」
「えッAが燒けたんですか」
と吃驚したT君の聲、皆の眼は役員樣とT君の驚き顏とを交く注目した。その時役員樣は僕を呼ばれた。僕はどきッとした。
「岡山のBさんの家が類燒したとの電話だ。御見舞電報を打つやう」
と云はれた。僕は餘りの事に蔽きのめされた樣に愕然とした。Bさんは僕の親戚だ。
「Aが燒たなら僕は行かなければならない」
T君は呆然と叫んで事務所へ走つて行つた。僕も電報を打つたが胸の鼓動は治まらなかつた。火事！　いかなる人力人智を以つても自然に打ち捷つ事は出來ない。何處かで惡魔の巨手が人の幸を搔亂して居るやうな怖れを感じてならなかつた。今日は一日中、火事の悍から離れられなかつた。夕方寺平の焚火が夕闇の中に眞赫な焰を揚げて居るのに恐怖を感じた。夜、床に就いたがこの寒空に燒け出されたB家族を思ふと寢つかれなかつた。(2)

鼠

宮崎泰賢

「ガタ〳〵ゴソ〳〵」畫眞だと言ふのに戸棚の中で微かな音がする。「ははあ、チユウ公だな」と思つて「こらッ」と呶鳴るとぴたりと運動を中止する。暫くすると亦ガタコソ初め出す呶鳴る。止める。こんな事を二三回繰り返す。
一心に試驗勉强をして居る身には、この木を嚙るやうな微かな音さへも大きく耳にこたへて癪に障る。つと立つて戸棚の戸をガラリと開ける。今迄の音がぱつたり止む。「搜し出さずに置くものか」と皿を除けたり壺をのけたり、だが天に昇つたか地に潛んだか、その影すら見あたらぬ。「まさか魔術を知つてゐるわけでもあるまい。何處にか潛んで居る筈だ」と念入りに隅から隅まで搔き廻す。チユウ公たまらず飛出す。
「そら逃げた」と追ひ廻すと障子の間に逃避行だ。アースを撒けたり、棒でつついたり、チユウ公居たまらず敗居を傳うて豆電車の樣に走り出す。「ソレッ亦逃げた今度は逃すな」と向ふに居る人にも賴んで狹打ちにすると、チユウ公め、得意の輕業で柱を駈け上り鴨居を傳つて逃げて仕舞ふ。噫、殘念な事をした。腕が泣ッ面をする。
併し鼠は「命拾ひした」と天井の巢で安堵の胸をなで下して居るだろう。さう思つて天井を眺める。とチユウ公めさつき逃げ込んだ穴から澄まし込んだ、よそ行きの顏を覗かせる。
「こいつ、一筋縄ではいかぬ奴だ」僕はそう思つて殘念だが鼠退治を諦めた。(1)